

# 平泉の仏教と景観

誉田慶信<sup>※</sup>

## はじめに

本報告は、平泉で執り行われた仏会のうち、衆と千僧供養の具体的な有り様と、その「歴史的な場」(景観)に注目することで、平泉の仏教の特色を概観しようとするものである。あわせて平泉の仏教の立ち位置を、京都、日本列島、アジアのなかから探ることとする。

## (1) 平泉仏土と京都の仏教

平泉は、京都、中国の仏教文化を導入してつくられた一大仏教都市である。藤原清衡が最初に建てた寺堂は、『法華経』「見宝塔品」の釈迦仏・多宝仏の二仏並坐を形象する多宝寺であった。釈迦信仰は、清衡・基衡・秀衡の三代、約100年間続いた平泉仏教の一大潮流であった。当時の京都では、大日如来を主尊とする密教が主流であった。しかし、清衡は、中国閩国の報恩多宝塔・中国敦煌莫高窟壁画・韓国慶州仏国寺で見られるような、東アジアにおけるスタンダードな釈迦信仰を採用していた。閩の王審知による仏教立国を清衡は学んだ、とする説もある。

藤原清衡は、1126年「鎮護国家大伽藍」落慶供養にあたり、本尊の釈迦仏に「異民族の地であった東北地方も京都もすべて等しく仏土であり、仏の救済は普く平等である」との願文を奉じた。東北地方は、約300年間にわたる戦乱の歴史を有していた。都から派遣される遠征軍によって再び平和が乱されないために、清衡は仏教の絶対平等に基づく平和戦略を、京都政権に向かって発信していたのである(「中尊寺供養願文」)。

平泉の仏教は、京都の仏教文化の単なる模倣ではなく、意識的に選択することで形成されていた。たとえば毛越寺は、京都白河の法勝寺金堂を手本にしながらも、独自性を保っていた。法勝寺金堂の本尊が大日如来であり、金堂の北西には夷狄調伏をおこなうための五大堂があったのに対して、五大堂は毛越寺に存在しなかったし、肝心の本尊も薬師如来であった。毛越寺のみならず、中尊寺、鎮護国家大伽藍、無量光院にも、異民族調伏の思想はなかった。北方民族との通商関係を担ってきた平泉藤原氏は、北海道でとれる皮革や鷲羽などを天皇に貢納していた。絶対平等の平泉の仏教理念は、北方民族にも届けられ、12世紀後半、いまの北海道勇払郡厚真の地に、経塚となって結実していた。

12世紀の日本の体制的仏教(顕密体制)は、王法仏法相依思想のもと、神祇体系と相互不可分の関係にあった。伊勢神宮・石清水八幡宮・賀茂社などの二十二社は天皇権力と京都を護る神社として

※ 岩手県立大学

位置づけられていた。しかし、伊勢神宮・八幡社・賀茂社のいずれも、奥州藤原氏時代の平泉には勧請されなかった。都市平泉の宗教構造は、京都のそれとは一線を画し、独自性を持っていた。中世都市平泉の鎮守群は、中央の惣社、霊山神（日吉・白山・金峰山）と都市神（祇園・北野・稲荷）、及び両神的性格の今熊野、そして王子社からなっていた（『吾妻鏡』文治5年9月17日「寺塔已下注文」）。

## （２）平泉の園池と楽の表象

仏教都市平泉は、水辺、園池の世界である。中尊寺大長寿院東方の三段池、金色堂東南方向にある大池、毛越寺（円隆寺・嘉勝寺）の大泉ヶ池、観自在王院の舞鶴ヶ池、無量光院の池、平泉館の池、白山社の池、達谷窟（西光寺）の池、千手堂の池など、数多くの園池が仏土景観を形成している。これらの園池は、さらに猫間ヶ淵、北上川の水辺の景観に囲まれていた。藤原基衡は、清衡時代の平泉を、京都郊外の鳥羽離宮に見られるような水閣へと発展させた。それは計画的な街路を有し、東西の軸線を重視した、より広大な仏土であり、壮麗な仏会の場としての毛越寺が建てられていた。園池を基調とする都市景観は、13世紀、武士政権のある都市鎌倉では明らかに後退している。

園池は、寺堂に安置された仏尊と僧侶の行により、仏土が現出する「場」となった。その時、仏土を荘厳する「音の景観」としての楽が、重要な役割を果たした。1126年、平泉の「鎮護国家大伽藍」落慶供養の場では、龍頭鷓首の船楽、左右の楽器・太鼓が、楽を担った。池に浮かぶ龍頭鷓首から流れる船楽により、荘厳で豪華な視覚的・聴覚的演出がおこなわれた。京都郊外の鳥羽離宮の池造作にあたって、鳥羽上皇は、焼失した龍頭船の新造を厳命している。龍頭鷓首の船楽は、王権の象徴でもあった。楽は、僧侶や参詣する人びとの動きや時空を律する上でも重要な役割をはたした。そのような楽が、平泉の仏土景観を内側から創り出していた。

早朝から夕刻に及ぶ供養会は、事前に作成された次第（供養式）に基づいて執りおこなわれた。供養式を作成したのは、仏会の先例故実を熟知した、日記『中右記』の著者、藤原宗忠のような貴族である。1126年、平泉の「鎮護国家大伽藍」落慶供養も、京都の仏会式次第に精通している貴族によって作成され、その次第に従って楽が奏でられ、仏会が進行した。僧侶や舞人による様々な行は、本尊の正面に設置された舞台を核としてくりひろげられた。平泉無量光院の阿弥陀仏の前、蓮池上にも、舞台が設けられていた。

12世紀後期の藤原秀衡の時におこなわれていた「年中恒例法会」には、多くの講読師・請僧とともに、舞人・楽人36人が参加していた（「寺塔以下注文」）。36という数字は、古代中国の礼楽の制度において諸侯の舞踊隊が36人だったことと、あるいは関係するのかもしれない。1189年、平泉を占領した源頼朝軍は、平泉館宝蔵内の沈紫檀以下唐木厨子のなかから象牙笛を発見している。1132年、京都の郊外、宇治平等院の経蔵に入った摂関家藤原忠実ら一行は、横笛（水龍）と高麗笛（名黒丸）を御覧、感歎していた。このことからわかるように、平泉館宝蔵の象牙笛も、中国からもたらされた楽器として、最大級の威信材となった。それは、平泉仏土サウンドスケープの権威を支えていたのである。

平泉仏会の場には、平泉在住の楽人のみならず、東北地方の有力寺院所属の楽人の姿も見られた。楽人・舞人36人を招請するのに、膨大な経費がかかった。そのために藤原清衡は私領を寄進していた。さらに平泉には京都から一流の楽人が来住していた。たとえば朝廷の楽所の一員であり、1144年、陸奥国に下向し、その後京都にもどり、法性寺御堂供養の日に楽所一員として活躍した笛の名手三宅成正もいた。京都からダイレクトに平泉に伝えられた楽は、仏教都市平泉のサウンドスケープの荘厳

さを生み出していた。

### (3) 千僧供養と平泉仏土

1126年、平泉「鎮護国家大伽藍」落慶供養の一大仏会では、千人の僧侶による法華経読誦（千僧供養）、紺紙金銀字交書一切経（それは中国五台山の影響をうけている）を使用した一切経会、夜の万灯会がおこなわれた。ここでは、特に千僧供養に注目したい。

千僧供養の淵源は中国にあった。陳の後主陳叔宝が皇太子に菩薩戒を授けた智顛のために千僧齋を設けた、という南宋の志磐撰『仏祖統記』の故事は有名である。11世紀中期から12世紀の日本において、千僧供養は、京都の大極殿、法勝寺や尊勝寺などの天皇家の寺、延暦寺や園城寺、奈良の東大寺や興福寺で催行された、国家的一大仏会であった。そこでは、天皇の病氣平癒や国土安穩が祈願され、仏会の主催者も天皇家や最上級貴族の藤原摂関家であった。また一大法会をなすために財源が確保され、僧侶の動員体制、組織的運営が整えられていた。

1118年2月21日、京都の法勝寺で、金堂の堂中に三百口、東西廊に各々三百五十口の僧侶が着座するなか、千僧供養が執り行われた（『中右記』）。金堂の翼廊は二十二間であり（それは、平泉「鎮護国家大伽藍」釈迦堂と同じである）、千僧が集うにふさわしい空間を有していた。千僧供養は、事前に定められた「供養式」に即して行われていた。1126年3月平泉で行われた千僧供養も、このような京都の千僧供養に限りなく近いものであった。「聚蚊之響尚成雷、千僧之声、定達天」という景観が作り出されたのである（「中尊寺供養願文」）。この仏会の「供養願文」を起草したのは、当代きつての文章博士、藤原敦光であり、落慶供養の導師を勤めたのは、延暦寺の高僧で、諸仏会の講師などを勤め式次第を熟知した、相仁であった。

千僧供養がおこなわれたのは、京都や奈良の大寺院以外では、平清盛政権の拠点である福原（今の神戸市）と、同じく平氏一族の信仰を集めた巖島神社（広島県）、そして平泉であった。1177年、平清盛は、京都大寺院の時と同様の式次第に基づき、巖島神社で千僧供養を執り行っている。この平氏政権の千僧供養に対置されるのが、日本列島の東北、平泉で1126年に行われた千僧供養であった。千僧供養は、正六位上の官位しか持たない藤原清衡が、とうてい執り行えるのではなく、異例中の異例、破天荒な仏会であった。藤原清衡は千僧供養を通して、仏教都市平泉の中心性を作りだしたのである。

千僧供養を開催するのに必要な財力、僧侶動員体系、京都仏教界とのネットワークを藤原清衡は持っていた。金銀字交書一切経書写に要する料紙も延暦寺から送られていたし、30年近くにわたって清衡は、延暦寺千僧供養に要する費用を送り続けた。また園城・東大・興福等の寺院から始まって、中国の天台山にいたるまで寺ごとに千人の僧侶を供養していた（「寺塔已下注文」）。中国天台山国清寺千僧供養のため、東北地方特産の金を送った。北海道から平泉へ、平泉から京都、博多、そして中国へと、通商立国の成立をめざす藤原清衡は、その仏土平泉を中国天台山にもつなげようとしたのである。

藤原清衡の死後、千僧供養の伝統は基衡、秀衡へ引き継がれ、千部会として平泉の年中恒例法会となった。さらに、藤原基衡は、『法華経』廿八巻を金字にて一日のうちに写経、講説し、それを千部作るといふ、気の遠くなるような作善（千部一日経）を、その生涯を通して積んでいった。金字法華経の千部一日経は、膨大な費用と僧侶の動員を必要とするため、京都でも藤原家成のような最有力貴族しか達成できないものであった。基衡の千部一日経の間答講には、この家成の妻と同父である増忠、

藤原氏道隆流家範の子で園城寺僧侶の範覚が招かれていた。この遠大なる仏会によって、平泉仏土は、その荘厳さを日常的に発揮し続けたのである。

## おわりに

藤原基衡は、壮麗なる浄土庭園をそなえた毛越寺を建立した。金堂円隆寺には、京都仏師雲慶作の薬師如来像が安置され、紫檀赤木をつなぎ、万宝をつくした荘厳が施された。藤原撰関家の当主であり、著名な書家でもあった藤原忠通が揮毫した円隆寺の額が、南大門に打たれることで、同寺の装束は成就した。長日にわたる造寺造仏、仏会開催の準備をへて、仏土景観の成就を意味づけ、権威の表象として門に打たれた扁額のルーツは、中国にあった。秀衡の時には、中国明州・博多を經由して取り寄せた宋版一切経をテキストにして、紺紙金字一切経書写もなされていた。あらためて、平泉仏土の要素が、中国文化につながっていることを確認するものである。